

十月の末

宮沢賢治

青空文庫

嘉かツコは、小さなわらじをはいて、赤いげんこを二つ顔の前にそろえて、ふっふつと息をふきかけながら、土間から外へ飛び出しました。外はつめたくて明るくて、そしてしんとしています。

嘉ツコのお母さんは、大きなけらを着て、繩なわを肩かたにかけて、そのあとから出て来ました。

「母が、昨夜ゆうべ、土あ、凍しみだじやい。」嘉ツコはしめつた黒い地面を、ばたばた踏ふみながら云いいました。

「うん、霜しもあ降ふつたのさ。今日は畑あ、土あぐじやぐじやづがベもや。」と嘉ツコのお母さんは、半分ひとりごとのように答えました。

嘉ツコのおばあさんが、やつぱりけらを着て、すっかり支度したくをして、家の中から出て来ました。

そして一寸手ちよつとをかざして、明るい空を見まわしながらつぶやきました。

「爺じんごあ、今朝も戻もどて来ないがべが。家えであこつたに忙いしよがしでば。」

「爺じんごあ、今朝も戻もどて来ないがべが。」嘉ツコがいきなり叫さけびました。

おばあさんはわらいました。

「うん。けづな爺じんごだもな。酔よたぐれでばかり居いで、一向仕事しごと助すけるもささないで。今日も町で飲んでらべあな。うなは爺じんごに

に肖るやないじやい。」

「ダゴダア、ダゴダア、ダゴダア。」嘉ツコはもう走つて垣かきの出口の柳やなぎの木を見ていました。

それはツンツン、ツンツンと鳴いて、
枝えだじゆう中はねあるく小さ
なみそさぎいで一杯いっぱいでした。

実に柳は、今はその細長い葉をすっかり落して、冷たい風にはんのすこしゆれ、そのてっぺんの青ぞらには、町のお祭りの晩のでんきがし電気菓子がしのような白い雲が、静に翔かけているのでした。

「ツツンツツン、チ、チ、ツン、ツン。」

みそさぎいどもは、とんだりはねたり、柳の木のなかで、じつにおもしろそうにやっています。柳の木のなかというわけは、葉

の落ちてカラツとなった柳の木の外側には、すっかりガラスが張つてあるような気がするのです。それですから、嘉ツコはますます大よろこびです。

けれどもとうとう、そのすきとおるガラス函ぼこもこわれました。

それはお母さんやおばあさんがこつちへ来ましたので、嘉ツコが「ダア。」といいながら、両手をあげたものですから、小さなみそさざいどもは、みんなまるでまん円になって、ぼろんと飛んでしまったのです。

さてみそさざいも飛びましたし、嘉ツコは走つて街道かいどうに出ました。

電信ばしらが、

「ゴーゴー、ガーガー、キイミイガアアヨオワア、ゴゴー、ゴゴ
ー、ゴゴー。」とうなっています。

嘉ツコは街道のまん中に小さな腕うでを組んで立ちながら、松並まつなみ
木きのあっちこっちをよくよく眺ながめましたが、松の葉がパサパサ
続くばかり、そのほかにはずうつとはずれのはずれの方に、白い
牛のようなものが頭だか足だか一寸出しているだけです。嘉ツコ
は街道を横ぎって、山の畑の方へ走りました。お母さんたちもあ
とから来ます。けれども、この路みちならば、お母さんよりおばあさ
んより、嘉ツコの方がよく知っているのです。路のまん中に一
寸顔を出している円いあばたの石ころさえも、嘉ツコはちやんと
知っているのです。厭あきる位知っているのです。

嘉ツコは林にはいりました。松の木や檜ならの木が、つんつんと光のそらに立っています。

林を通り抜ぬけると、そこが嘉ツコの家まめばたけの豆畑たけでした。

豆ばたけは、今はもう、茶色の豆の木でぎっしりです。

豆はみな厚い茶色の外がい套とうを着て、百列にも二百列にもなつて、サツサツと歩いている兵隊のようです。

お日さまはそらのうすぐもにはいり、向うの方のすすきの野原がうすく光っています。

黒い鳥がその空の青じろいはてを、ななめにかけて行きました。お母さんたちがやつと林から出て来ました。それから向うの畑のへりを、もう二人の人が光つてこっちへやつて参ります。一人

は大きく一人は黒くて小さいのでした。

それはたしかに、隣となりの善ぜんコと、そのお母さんとにちがいありません。

「ホー、善コオ。」嘉ツコは高く叫びました。

「ホー。」高く返事が響ひびいて来ます。そして二人はどっちからもかけ寄って、ちようど畑さかいの堺さかいで会いました。善コの家いへの畑も、茶色外套うわぬの豆の木の兵隊で一杯です。

「汝うないの家いへさ、今朝、霜降しもふりつたが。」と嘉ツコがたずねました。

「霜しもあ、おれあの家いへさ降ふりつた。うないの家いへさ降ふりつたが。」善コがいました。

「うん、降ふりつた。」

それから二人は善コのお母さんが持つて来た蓆むしろの上に座すわりました。お母さんたちはうしろで立つて談はなしています。

二人はむしろに座つて、

「わああああああああ。」と云いながら両手で耳を塞ふさいだりあけたりして遊びました。ところが不思議なことは、「わああああんああああ。」と云わないでも、両手で耳を塞いだりあけたりしますと、

「カーカーコココー、ジャー。」という水の流れるような音が聞えるのでした。

「じゃ、汝うな、あの音あ何の音だが覚おぼえだか。」

と嘉ツコが云いました。善コもしばらくやって見ていましたが、

やっぱりどうしてもそれがわからないらしく困ったように、

「奇体きたいだな。」と云いました。

その時丁度嘉ツコのお母さんが畦あぜの向うの方から豆を抜きながらだんだんこつちへ来ましたので、嘉ツコは高く叫びました。

「母が、こう云ゆにしてガアガアど聞えるものあ何だべ。」

「西根山にしねやまの滝たきの音さ。」お母さんは豆の根の土をばたばた落しながら云いました。二人は西根山の方を見ました。けれどもそこから滝の音が聞えて来るとはどうも思われませんでした。

お母さんが向うへ行つて今度はおばあさんが来ました。

「ばさん。こう云ゆにしてガアガアコーコーど鳴るものあ何だべ。」

おばあさんはやれやれと腰こしをのばして、手の甲こうで額ちよつとを一寸こ

すりながら、二人の方を見て云いました。

「天あまの邪鬼しやくの小便しよんべの音さ。」

二人は変な顔をしながら黙だまつてしばらくその音を呼び寄せて聞いていましたが、俄にわかに善ぜんコがびっくりする位叫びました。

「ほう、天の邪鬼の小便あ永いな。」

そこで嘉ツコが飛びあがって笑つておばあさんの所に走つて行つていいました。

「アツハツハ、ばさん。天の邪鬼の小便あたまげだ永いな。」

「永いてさ、天の邪鬼あいつも小便、垂れ通しさ。」とおばあさんはすまして云いながら又また豆を抜きました。嘉ツコは呆あきれてぼんやりとむしろに座りました。

お日さまはうすい白雲にはいり、黒い鳥が高く高く環わをつくつています。その雲のこつち、豆の畑の向うを、鼠ねずみいろ色の服を着て、鳥打をかぶつたせいのむやみに高い男が、なにかたくさん肩にかついで大股おおまたに歩いて行きます。

「兵隊さん。」善コが叫びながらそつちへかけ出しました。

「兵隊さんだない。鉄砲てつぽう持つてないぞ。」嘉ツコも走りながら云いました。

「兵隊さん。」善コが又叫びました。

「兵隊さんだない。鉄砲持つてないぞ。」けれどもその時は二人はもう旅人の三間ばかりこつちまで来ていました。

「兵隊さん。」善コは又叫んでからおかしな顔をしてしまいました

た。見るとその人は赤ひげで西洋人なのです。おまけにその男が口を大きくして叫びました。

「グルルル、グルウ、ユー、リトル、ラズカルズ、ユー、プレイ、トラウント、ビ、オッフ、ナウ、スカッド、アウエイ、テウ、スクール。」

かみなりと雷のような声でどなりました。そこで二人はもうグーとも云わず、まん円になって一目散に逃げました。するとうしろではないかにも面おもしろ白そうに高く笑う声がします。向うの方ではお母さんたちが心配そうに手をかざしてこっちを見ていましたが、やがて一寸おじぎをしました。二人は振り返って見ますとその鼠色の旅人も笑いながら帽子ぼうしをとっておじぎをして居おりました。そして又

大股に向うに歩いて行つてしまいました。

お日さまが又かつと明るくなり、二人はむしろに座つてひばりもないのに、

「ひばり焼げこ、ひばりこんぶりこ、」なんて出鱈目でたらめなひばりの歌を歌っていました。

そのうちに嘉ツコがふと思ひ出したように歌をやめて、一寸顔をしかめました。俄かに云いました。

「じゃ、うないの爺じんごあ、酔つたぐれだが。」

「うんにや、おれあの爺じんごあ酔つたぐれだない。」善コが答えました。

「そだら、うないの爺じんごど俺あの爺じんごど、爺じんご取かつ換えだ

らいがベじやい。取つ換えないどが。」嘉ツコがこれを云うか云わないにウンと云うくらいひどく耳をひっぱられました。見ると嘉ツコのおじいさんがけらを着て章魚たこのような赤い顔をして嘉ツコを上から見おろしているのです。

「なにしたど。爺おじんご取つ換えんど。それよりもうなのごと山山のへっぴり伯父おじさ呉けでやるべが。」

「じさん、許せゆるせ、取つ換えないはんで、ゆるせ。」嘉ツコは泣きそうになってあやまりました。そこでじいさんは笑って自分も豆を抜きはじめました。

*

火は赤く燃えています。けむりは主におじいさんの方へ行きま
す。

嘉ツコは、黒猫くろねこをしつぽでつかまえて、ギツと云うくらいに
抱だいていました。向う側ではもう学校に行っている嘉ツコの兄さ
んが、鞆かぼんから読とく本ほんを出して声を立てて読んでいました。

「松を火にたくいろりのそばで

よるはよもやまはなしがはずむ

母が手ぎわのだいこんなます

これがいなかのとしこしぎかな。第十三課……。」

「何したど。大根なますだど。としこしぎがなだど。あんまりけ

づな書物だな。」とおじいさんがいきなり云いました。そこで嘉ツコのお父さんも笑いました。

「なあにこの書物あ、けんやく儉約教えだのだべも。」

ところが嘉ツコの兄さんは、すっかり怒ってしまいました。そしてまるで泣き出しそうになって、読本を鞆にしまつて、

「嘉ツコ、猫おおれさ寄越せじや。」と云いました。

「わがないんちや。厭やんたんちや。」と嘉ツコが云いました。

「寄越せつたら、寄越せ。嘉ツコお。わあい。寄越せじやあ。」

「厭やんたあ、厭やんたあ、厭やんたつたら。」

「そだら撲はだぐじやい。いいが。」嘉ツコの兄さんが向うで立ちあがりました。おじいさんがそれをとめ、嘉ツコがすばやく逃げ

かかったとき、にわかとほう俄に途方もない、空の青セメントが一ぺんに落ちたというようなガタアツという音がして家はぐらぐらつとゆれ、みんなはぼかっとして呆れてしまいました。猫は嘉ツコの手からすべ滑り落ちて、ぶるるつとからだをふるわせて、それから一目散にどこかへ走って行ってしまいました。「ガリガリツ、ゴロゴロゴロゴロ。」音は続き、それからバアツと表の方が鳴って何か石ころのようなものが一散に降って来たようすです。

「お雷らいさんだ。」おじいさんが云いました。

「雹ひょうだ。」お父さんが云いました。ガアガアツというその雹の音の向うから、

「ホーオ。」ととなりの善コの声が聞えます。

「ホーオ。」と嘉ツコが答えました。

「ホーオオ。」となりで又叫んでいきます。

「ホーオオー。」嘉ツコが咽喉のど一杯ふえ笛ふえのようにして叫びました。

俄に外の音はやみ、淵ふちの底のようにしずかになってしまつて氣味が悪いくらいです。

嘉ツコの兄さんは霜を取ろうと下駄げたをはいて表に出ました。嘉ツコも続いて出ました。空はまるで新らしく拭ふいた鏡のようになめらかで、青い七日ごろのお月さまがそのまん中にかかり、地面はぎらぎら光つて嘉ツコは一寸ちよつと氷砂糖をふりまいたのだとさえ思いました。

南のずうつと向うの方は、白い雲か霧きりかがかかり、稲光いなびかりが

月あかりの中をたびたび白く渡ります。二人は雀の卵ぐらいある
雹の粒をひろつて愕ろきました。

「ホーオ。」善コの声がかかります。

「ホーオ。」嘉ツコと嘉ツコの兄さんとは一所に叫びながら垣根
の柳の木の下まで出て行きました。となりの垣根からも小さな黒
い影がプイツと出てこつちへやつて参ります。善コです。嘉ツコ
は走りしました。

「ほお、雹だじやい。大きじやい。こつたに大きじやい。」

善コも一杯つかんでいました。

「俺家のなもこの位あるじやい。」

稲ずまが又白く光つて通り過ぎました。

「あ、山山のへっぴり伯父。」嘉ツコがいきなり西を指さしました。西根の山山のへっぴり伯父は月光に青く光って長々とからだを横たえました。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年7月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

十月の末

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>